

ローマの信徒への手紙 15章 30節～33節 兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストによって、また、“霊”が与えてくださる愛によってお願いします。どうか、わたしのために、わたしと一緒に神に熱心に祈ってください、わたしがユダヤにいる不信の者たちから守られ、エルサレムに対するわたしの奉仕が聖なる者たちに歓迎されるように、こうして、神の御心によって喜びのうちにそちらへ行き、あなたがたのもとで憩うことができるように。平和の源である神があなたがた一同と共におられるように、アーメン。

パウロは、「兄弟たち」と呼びかけ、「わたしたちの主イエス・キリストによって、また、“霊”が与えてくださる愛によってお願いします。どうか、わたしのために、わたしと一緒に神に熱心に祈ってください」と、言葉を重ねて熱心に祈りを懇願している。エルサレムに向かうパウロはその身に、二つの問題を抱えていた。一つは、エルサレム教会に異邦人教会からの援助を歓迎して受け取ってもらえるかという不安である。ユダヤ人は異邦人を汚れた民として差別し、口も利かない関係にあったからである。しかし、使徒言行録 10章では、ペトロがカイサリアでローマの百人隊長宅に行き、「神は人を分け隔てしないことが、よく分かりました」と言って、福音を伝えている。エルサレム教会は次第に民族の壁を乗り越え、異邦人教会からの援助を受け入れることに抵抗はなく、歓迎するようになっていた。もう一つの問題は「わたしがユダヤにいる不信の者たちから守られ」るかどうかという恐怖で、これは深刻な問題であった。パウロは将来を嘱望されたファリサイ派の学徒であった。ところが、キリスト教に回心してから、律法は罪を生み、死に至らせると律法無用論を説いたのだから、元の仲間に見れば、許し難い「裏切り者」となった訳である。パウロがエルサレムに入ろうものなら、暗殺するという輩が跋扈していた。援助は、パウロの忠実な弟子テモテにでも託せば、安全に届けられたのではないかと思うが、なぜ、危険を顧みず、自分自身でエルサレムに向かったのであろうか。援助を届けるだけでなく、エルサレム教会と異邦人教会の間で、信仰に関わる問題に関し協議しなければならない案件があったのではないかと推察するが、その証拠を示すものはない。パウロの援助活動に対し、コリント教会では、名声を得たいためとか、あるいは、くすねているという誤解も噂されていた。それらを、きっぱり打ち消すために、エルサレム行きを決意したとも考えられる。使徒言行録では、パウロはエルサレム神殿でユダヤ人に捕らえられリンチされそうになったが、ローマ軍に捕らえられた。パウロはローマの市民権を盾に、皇帝に上訴して、ローマで軟禁状態の中で宣教に励んだと伝えている。伝承では、ネロ皇帝時代に殉教させられたと伝えられている。パウロはローマ教会宛てに、「神の御心によって喜びのうちにそちらへ行き、あなたがたのもとで憩うことができるように。平和の源である神があなたがた一同と共におられるように、アーメン」と、エルサレムで無事に目的を果たし、ローマ教会で憩うことができるように、平和の神が臨在されるようにと祈りを合わせることを求めている。

ローマ書は 15章で、本論は終わっている。聖なるものに触れ、ひたすら福音を語るパウロに、ただ感動させられる。パウロの言葉によって、どれほどの人々が救われてきたであろうか。私もその一人である。私の救いは、自分がどんな人間であれ、人からどんなに評価されようとも、キリストの真実（十字架と復活）によって、絶対的に「よし」と是認されているという福音である。私は、これに立ち、語り続けてきた。感謝である。